

事業の名称

ラムサール条約登録予定湿地 涸沼のワイズユース等に関する事業

〔事業責任者〕

事業テーマ：地域の教育力向上
地域環境の形成
自治体との連携
学術文化の推進

（自治体等側）

茨城町・町長 小林 宣夫

（大学側）

教育学部・准教授 石島恵美子

連携先

茨城町、NPO 環～WA

（その他、民泊体験プログラム実施として、ひろ
うら田舎暮らし体験推進協議会、インタビュー
先・アンケートへのご協力として、ひまわり工房、
茨城県立茨城東高等学校、イオンタウン水戸南、
地域のみなさま）

プロジェクト参加者

小林 宣夫（茨城町・町長 担当：事業責任者）
酒井 和二（茨城町・副町長 担当：学官の連携）
眞家 誠（茨城町・町長公室・室長 担当：国
内実践演習・戦略的地域連携プロ
ジェクト）
横田 修一（茨城町・企画政策課・課長 担当：
国内実践演習・戦略的地域連携プロ
ジェクト）
庄司 克也（茨城町・企画政策課・企画調整グ
ループ長 担当：国内実践演習）
田口 眞一（茨城町・企画政策課・ラムサール推
進室長 担当：戦略的地域連携プロ
ジェクト）
郡司美知子（茨城県立茨城東高等学校・教諭
担当：講演会、いばらきまつり）
平澤 文子（NPO 環～WA・代表理事 担当：
国内実践教育演習）
石島恵美子（茨城大学・准教授 担当：国内実践
教育演習）
阿部信一郎（茨城大学・教授 担当：国内実践教

育演習）

田村 誠（茨城大学・准教授 担当：国内実践
教育演習）

安島 清武（茨城大学・教務補佐員 担当：全般
及び演習の補佐）

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

（自治体等側）

平成 27 年 5 月にラムサール条約へ登録された
涸沼に関して、涸沼の豊かさや恵みを再認識する
とともに、登録後のワイズユース、まちづくり、
観光等について、産学官民が一体となった取組み
を行い、住民や学生の参画の拠点として、また、
環境学習や生活文化の伝承の場として、大学と共
に地域を活性化することを目的とする。

（大学側）

茨城町と茨城大学は、古くから連携しており、
その関係は、大学発足当時の昭和 24 年に民家を
借り「涸沼研究所」がつくられたことに遡る。そ
の後「涸沼臨湖実習実験所（開設：昭和 31 年 11
月）」が開かれ、同所には研究業績集（昭和 30 年
－昭和 42 年）も存在している。近年では、本プ
ロジェクトによる「茨城町の学校統廃合に対する
支援事業」や人文学部市民共創教育研究センター
（人文学部との協定、平成 25 年 1 月 23 日締結）
との連携による魅力再発見プロジェクトやさく
らウォークの実施等を行ってきた。茨城町は県
央に位置し、豊かな自然に包まれ、平成 27 年 5

月には涸沼がラムサール条約に登録された。平成 26 年度の大学院科目「国内実践教育演習」のフィールドとして茨城町で実施することにより、受講者の地域参画意識、問題解決能力、コミュニケーション能力の向上に力を入れている。これらの活動を通して、平成 28 年 3 月 25 日には人文学部との連携協定を全学に広げ、茨城町と本学との地域連携をさらに深めている。

②連携の方法及び具体的な活動計画

(自治体等側)

現地調査への協力、先進登録地視察に係る段取り及び実施の一切、各種情報提供、関係団体と茨城大学との橋渡し、本プロジェクト実施に係る住民への周知等を行い、茨城大学とともに、地域の行政課題の調査研究を進め、これらの課題解決の実施に向けた施策立案等を行う。

・大学院演習科目「国内実践教育演習」

昨年度に引き続き茨城町をフィールドとして実施し、大学院生が培ってきた専門性を生かし、実地に即した問題解決能力やコミュニケーション能力に磨きをかける。

・新たな恵みプロジェクト

涸沼周辺で獲れた魚介類等の食用について調査研究。環境の現状や涸沼漁業の実態を知り、地域に依存してきた人間本来の生活スタイルを改めて思い起こすことで、地域の自然環境や生物多様性を守る重要性を再認識する。

・つと豆腐プロジェクト

「つと豆腐」を使用した「涸沼の恵み井」の開発と、「つと豆腐」を土産物品として提案する。「つと豆腐」に関する食文化、歴史などを住民インタビューで明らかにし、パンフレットを作成する。

③期待される成果

(自治体側等)

学生等若者に涸沼をはじめとした茨城町の魅力を喚起でき、町おこしの足がかりとして期待ができる。また、インタビュー調査を行い、「涸沼の恵み井」の開発や「パンフレット」につなげるこ

とができる。

(大学側)

「地域に根ざした総合大学」を目指した本学としても、ラムサール条約登録という茨城町にとって歴史的な出来事に学術機関として連携・協力できることは意義深い。受講する大学院生の問題解決能力やコミュニケーション能力の向上という点でも意義があり、これを通じた地域連携を実施する。

プロジェクトの実施成果

① 活動実績

1) ホームページ

今年度の大学院演習「国内実践教育演習」の実施状況については、大学院サステナビリティ学教育プログラムのホームページ上で公開している。

<http://www.grad.ibaraki.ac.jp/gpss/>

2) 大学院・サステナビリティ学教育プログラム演習科目「国内実践教育演習」

茨城町をフィールドに、3 年目となる大学院「国内実践教育演習」を行った。日程をおって概要を記す。

平成 28 年 9 月 9 日 (金)

茨城町役場と共同で、2015 年 5 月にラムサール条約に登録された涸沼のフィールドワークを行った (図 1)。その後、茨城町の地域資源の活用について考えることを目的とした「茨城町で代々受け継がれてきた食を探るインタビュー調査」を 3 班に分かれ行った (図 2)。昼には「つと豆腐」を使用した「つとまぶし丼 (平成 27 年調理研究ゼミ考案)」を試食し (図 3)、午後は、「ひろうら田舎暮らし体験推進協議会」が中心となって行っている民泊体験プログラムに参加し、つと豆腐・花巻寿司づくり体験 (図 4) を行った。夜は農家民泊体験として、各ご家庭にホームステイを行った。

平成 28 年 9 月 10 日 (土)

早朝は民泊体験プログラムの一部である涸沼で

のいかだ体験を行った。イオンタウン水戸南へ移動し、茨城町で代々受け継がれてきた「つと豆腐」の試食会＆購買意欲等に関するアンケート調査を行った（図5）。調査には、茨城町役場や茨城東高等学校の生徒18名、つと豆腐を茨城町でつくっているひまわり工房の山口様とも共同で、総勢30名以上で手分けし行った。4時間ほどの調査で、最終的に238名の方にアンケートへのご協力をいただいた。

なお、アンケート調査の様子は複数のメディアに取り上げられた。[「郷土料理「つと豆腐」復興へ 大学生から高校生へバトン託す」（平成28年9月9日）水戸経済新聞] [「つと豆腐」復活へ試食会 茨城大・茨城東高・茨城町買い物客らの反応探る」（平成28年9月14日）茨城新聞]

3) 民泊体験プログラム

昨年同様、「国内実践教育演習」（前掲）では、ひろうら田舎暮らし体験推進協議会に協力をいただき、1泊2日の民泊体験プログラムを実施した。



図3 「つと豆腐」を使用した「つとまぶし丼」



図1 酒沼でのフィールドワーク



図4 巻寿司づくり体験



図2 代々受け継がれてきた食を探るインタビュー調査



図5 茨城東高校生と共同で行ったアンケート調査

4) 「つと豆腐」のアンケート調査

2 日間に渡り行った「国内実践教育演習」(前掲)の 2 日目(平成 28 年 9 月 10 日)に、イオンタウン水戸南において「つと豆腐」の試食会と購買意欲等に関するアンケート調査を行った。茨城町職員や県立茨城東高等学校の生徒の参加を得て実施した。

5) パンフレット・のぼりの作成

「国内実践教育演習」(前掲)でのインタビュー・アンケート調査や 3 年間行ってきた「つと豆腐プロジェクト」の集大成として、パンフレット「いばらきまちで暮らすー郷土料理“つと豆腐”de ひとしな」(図 6)、そして広報用にポスター(図 7) とのぼり(図 8)を作成した。役場をはじめ県内に広く配布した。

これらの成果物は、茨城町の HP 上でも公開している。

<http://www.town.ibaraki.lg.jp/>

6) 論文等の発表

3 年間のプロジェクトの結果を論文等にまとめ発表した(論文 2 本、口頭発表 1 本)。

- ・「茨城県・涸沼のワイズユースおよび地域資源の有効活用に向けてーラムサール条約登録前後における茨城町住民意識調査」(2016) 田村誠・安島清武・阿部信一郎・石島恵美子, 茨城大学人文学部紀要社会科学論集
- ・「茨城町の郷土料理「つと豆腐」の購入意向に関連した消費者特性」(投稿中) 石島恵美子・安島清武・田口眞一・櫻井輔・田村誠・阿部信一郎, 日本調理科学会誌
- ・「茨城町郷土料理「つと豆腐」の伝承状況とその関連要因」(2016) 石島恵美子・阿部信一郎・田村誠・安島清武, 日本調理学会(口頭発表)



図 6 パンフレット「いばらきまちで暮らす」



図7 「つと豆腐」PRのポスター



図8 「つと豆腐」PRののぼり

7) 「つと豆腐プロジェクト」の活動報告

涸沼流域の郷土料理の「つと豆腐」の伝承に関わる活動を通して、潜在化した茨城町の生活文化や歴史を発掘し、町民が地域に根ざす意識を育み、真の町おこしを目指すために活動を行った。

7.1. 民泊体験プログラム「つと豆腐体験」のプログラム化研修会

平成28年10月26日（金）

茨城大学とひろうら田舎暮らし体験推進協議会の共催で、「つと豆腐体験教室の講師研修会」を実施した。参加者は、同協議会の民泊経営の10名と教育学部学生12名であった（図9）。なお、この後台湾などの海外からの民泊利用者に向けて「つと豆腐体験」が行われている。



図9 つと豆腐体験教室の講師研修会

7.2. 茨城東高等学校での講演会

平成28年11月1日に「社会参画ってなんだろう～つと豆腐復興プロジェクトの活動をとおして～」という演題で、同校1年生160名を対象に講演会を行った。

7.3. 「いばらきまつり」出展

平成28年11月6日（土）において、茨城大学と茨城東高校が協働で、つと豆腐のアレンジ料理である「つと豆腐フライ」を試食提供し、アンケート調査や「つと豆腐教室」を実施した（図10、11）。



図10 「つと豆腐フライ」試食会



図 11 「つと豆腐教室」も開催

なお、当日の様子は、茨城新聞に取り上げられた。[「つと豆腐」復興へ 茨城大 高校生と連携し 推進（平成 29 年 1 月 1 日）茨城新聞]

7.4.「日本調理科学会」での活動

平成 29 年 3 月茨城町の住民から郷土料理の聞き取り調査を行った。

なお、この成果は「次世代に伝え継ぐ日本の家庭料理」の茨城県版に掲載予定である。（平成 29 年）

8) プーケット・ラチャパット大学の民泊体験プログラム参加

タイ王国のプーケット・ラチャパット大学とは協働で大学院「国際実践教育演習」を開講しているが、その教職員・学生 15 名が初来日し、茨城町にて 1 泊 2 日（平成 28 年 5 月 24 日～ 25 日）の民泊体験プログラムを実施した（図 12）。

②プロジェクトの達成状況

本プロジェクトは 3 年計画で実施してきた。大学院演習や石島ゼミでの活動と絡めた場合、学生数が先読みできないことから、計画に挙げた項目を実施することには困難も予想された。

しかし、茨城町、NPO 環～WA、ひろうら田舎暮らし体験推進協議会、ひまわり工房、茨城県立茨城東高等学校、イオンタウン水戸南、インタビュー・アンケートにご協力いただいた地域のみなさまと多くの方のご協力いただき、無事 3 年間



図 12 プーケット・ラチャパット大学の学生も民泊体験プログラムに参加

を締めくくることができた。

特にこの 3 年間の集大成として、茨城町に受け継がれてきた郷土料理「つと豆腐」を再発見するパンフレット（前掲）を作成することができたことは、プロジェクトの足跡を残し今後の発展への布石となる大きな成果である。

③今後の計画と課題

本プロジェクトは本年度で最終年度となるが、今後も本プロジェクトで生まれた茨城町との連携は継続・発展していく。

本年度に初来日したプーケット・ラチャパット大学の再来日が来年度の 6 月に予定されており、それに合わせ「国内実践教育演習」を茨城町で実施予定である。4 年目となる「国内実践教育演習」はタイの学生・教職員を交え更なる発展を遂げようとしている。

本プロジェクトがきっかけとなり復興された「つと豆腐」を中心とし、茨城町の生活文化に注目をする仕組みづくりを支援する。生活文化を大切に、次世代へ伝え継ぐことで、持続可能な社会の形成の一助となるよう活動を継続する。

最後に、本プロジェクトは、短期間ではあるが、参加学生が大きく成長する場になっている。その機会を提供いただいた茨城町、ご関係の皆様、改めて感謝申し上げる。